

# はじめに

日頃より、市民の皆様をはじめ多くの方々から、矢作川研究所の調査研究活動および運営に対し、多大なご支援、ご指導、ご協力をいただき、心よりお礼申し上げます。おかげさまで、平成9年3月の創刊以来、ここに節目となる第20号の所報を発刊することが出来ました。これもひとえに関係した皆様のご尽力の積み重ねと敬服する次第であります。

22年目を迎えた矢作川研究所は、「河川を通じた環境意識の啓発または自然と共生した川づくりを図り、市民生活の豊かさに寄与」すること目的に、矢作川流域の自然環境及び社会的な特性に関して、日々調査研究を進め、多くの学術的成果を蓄積してまいりました。過去の所報を読み返しますと、創刊号で、当時の矢作川研究所会長であります鈴木公平氏は、「科学的な手法を模索して矢作川の現状を調査研究し、疫学的な手法を模索して自然豊かな矢作川を保全する具体策を探求し、客観的な議論の材料を社会に提供することの意義は大きなものがあります。このような思いの中で豊田市矢作川研究所が発足しました。」と研究所への大きな役割と期待を語っております。また、バックナンバーに掲載されています文献は、その時代背景を反映した調査研究テーマに取り組んだ先輩方々の功績であり、試行錯誤を繰り返しながらも研究所の礎を築いた素晴らしいものばかりであります。

しかし、昨今の研究所の調査研究活動を振り返りますと、「客観的な議論の材料を社会に提供する」という役割に関しては、客観的な議論の材料がアカデミックであり、河川関係者への情報提供に限られている感が否めません。このままでは、「市民生活の豊かさに寄与」という目的に向かって歩む研究成果を発現することは、なかなか難しいと思われれます。先輩方々の初心を振り返り反省の意を込め、今後の矢作川研究所のめざす活動方針として、“客観的な議論の材料”を調査研究より見える“矢作川の魅力”として、また“社会”を“市民の皆様”と捉え、河川関係者だけでなく広く共感の輪が広がる市民目線での調査研究活動を展開し、市民の皆様をはじめ多くの方々に興味を持っていただける研究成果が情報発信できるよう、創意工夫をしてまいります。

創刊号から比較して、若干厚さが薄くなってきている昨今の所報を見つつ、今後の調査研究活動への意気込みを表明させていただき、ご挨拶とさせていただきます。

平成28年3月

豊田市矢作川研究所 所長  
早川 匡